様式３

２０１９年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

もっとコットン！「ワタ」から広がる和文化プロジェクト
～“OMOTENASHI”から“OTOMODACHI”へ～

代表者　　林　美玖（経済学部地域社会システム学科 3 年）

１．目的と概要

本プロジェクトは、外国人観光客及び外国人居住者に対し、讃岐三白（砂糖・塩・綿）の 1 つである「綿」を取り入れた、和文化体験イヴェントや県内を中心としたショート・ツアーを英語で実施するものである。活動目的は以下の 3 点であった：（1）地域から寄付された香川県産の種から綿花を栽培し、香川県で綿産業が廃れた社会的背景や、その復興運動が抱える課題について考える；（2）外国人参加者に香川県の綿の歴史について英語で説明し、讃岐三白の存在を国際的に伝えていく；（3）参加型のイヴェントを提供することで、参加者、学生、そして地域社会・住民間の対等で継続的なつながりを築く

このような目的のもと、綿を使用した和文化体験イヴェントを実施した。また、かつて綿花栽培が盛んであった、三豊市志々島にて、綿を使用した和小物製作と、志々島の自然体験とを組み合わせたショート・ツアーを行った。これらの活動を通じて、単に外国人観光客を「おもてなし OMOTENASHI」するのではなく、本プロジェクトが媒介者として、外国人と地域社会との間で、互いの文化・社会的背景を理解し合える「おともだち OTOMODACHI」のような関係を築き上げていくことを目指した。

２．実施期間（実施日）

平成 31 年 4 月 1 日から　令和 2 年 3 月 31 日まで

３．成果の内容及びその分析・評価等

（１）綿の実験的栽培とフィールドワーク

昨年度 2019 年の 2 月から 3 月にかけて、香川県の地域資源についての調査をした際、讃岐三白の 1 つである綿の知名度の低さと綿産業の衰退について学んだ。その理由を考えるために、実際にプロジェクト活動の中で綿花栽培を行った。また、観音寺市にある豊浜町郷土資料館と、かつて綿産業が行われていた志々島においても、綿産業史と現状について聞き取り調査を行った。

・実験的な綿の栽培と収穫

本プロジェクトの開始以前に地域の方から譲り受けた綿の種を用いて、2019 年の 5 月から 9 月にかけて、学内とメンバーの自宅において綿花栽培を行った（図 1）。

5 月 12 日に学内で実施した種まき作業は、留学生と共に行った。その際には、讃岐三白の説明や香川県の綿産業について英語で説明した。

図 1：収穫した綿

・豊浜町郷土資料館における地域社会調査

2020 年 3 月 23 日、かつて香川県内で最も盛んに綿花栽培が行われていた観音寺市豊浜町の郷土資料館（コットンミュージアム）でフィールドワークを行い、香川県における綿産業史や衰退の原因について探った。同資料館では、かつて使用されていた手動の機械（綿繰り機、糸車、機織り機など）を用いて、綿を綿糸や織物へと加工していく過程を体験した。各作業には相当な時間と技量が必要であるということを実感した。また、1 つの織物を製作するためには、広大な土地と莫大な労働力が必要であることを学んだ。そのため、それらが揃うアメリカや中国などの諸外国で、盛んに綿花栽培が行われるようになった。その結果、香川県をはじめとする日本各地において、より低コストで生産することのできる諸外国へ綿の輸入を頼るようになったため、綿産業が衰退していったことが分かった。

・三豊市志々島の島民への聞き取り調査

三豊市にある周囲 3.8km、住民 20 名弱の志々島は、かつて「花の島」として知られ、キンセンカや小菊といった仏花や綿花の栽培が盛んに行われていた。しかし、島民の高齢化や継承者の減少によって、現在では綿産業は廃れてしまっている。同プロジェクト開始以前の 2019 年 3 月 22 日に、第 1 回目のフィールドワーク及び島民への聞き取り調査（詳細は後述）を行った。その際、志々島での綿花栽培の歴史や課題について話を聞く機会を得た。90 年以上前には収穫した綿を用いて着物や綿を織っていたが、綿花の維持管理は難しく、次第に綿花栽培を生業とする島民が減少していったことが明らかになった。

このような労働力不足や綿花栽培の維持管理の難しさが、香川県の綿産業衰退の背景にあったことが、プロジェクトの調査により明らかになった。一方、プロジェクトでの実験的栽培が成功したように、小規模の綿花栽培は各家庭で可能であることも分かった。これらの結果から、香川県で綿花栽培を復興させるためには、綿について、多くの人々と共に考え合えるような場作りをする必要がある。よって、「おともだち OTOMODACHI」として、外国人参加者と共に、地域特有の課題について考えることができるようなイヴェントの存在が重要なのではないかと考えるようになった。また、参加者に自分たちが栽培した香川県の綿の種を無償で配布することで、綿花栽培に親しむ人々を少しでも増やすことができるのではないかと考えた。上記をふまえて、本プロジェクトでは以下のような綿を用いたイヴェントを実施した。

（２）綿を用いた和文化体験イヴェントの実施

香川県の綿を使用したくるみボタンの製作を始めとした和文化体験イヴェントを、本プ

ロジェクト期間のうち、計 5 回実施した。各イヴェントの詳細は、以下の通りである。

・くるみボタンワークショップ

くるみボタンとは、金属製のボタンの表面に綿を乗せ、布でくるんだボタンのことである。様々なアレンジをすることができ、針や糸を使わないため、小さな子供からお年寄りまで幅広い年齢層の人々が楽しむことができる。本プロジェクトが行ったイヴェントでは、香川県の綿を用いたくるみボタンを参加者に製作してもらった。

2019 年 7 月 6、7、13 日には高松市内のホテル WeBase 高松と香川大学が共催したイヴェント「SHIP'S CAT+kame3 2019 祝祭 ——おいでまい、高松丸亀町商店街—— ツクル（作・造・創）by 香川大学」において、くるみボタンのワークショップを行った（図 2）。多様な年齢、国籍を持つ参加者に英語と日本語の両言語で対応し、和小物を製作してもらった。

図 2：SHIP'S CAT+kame3 2019 祝祭（2019 年 7 月 6 日）

また、イヴェント時に WeBase 高松の担当者と、同ホテルの宿泊客の動向について話す機会があった。これに基づき、「夜にふらっとワークショップ」という名称の夜型イヴェントを企画し、実施する運びとなった。これは、宿泊客が時間を持て余す週末の夜の時間帯に、英語と日本語の両言語で香川県の綿をテーマとしたワークショップを行うというものである。

10 月 26 日に開催した第 1 回目の「夜にふらっとワークショップ」では、参加者にハロウィーンモチーフのくるみボタンを製作してもらった。メンバーがハロウィーンにちなんだデザインを考案し、事前にパーツを準備した。25 名（うち外国人参加者 11 名）の参加者からは、デザイン性のあるくるみボタンを簡単に作ることができたと高評価を得ることができた（図 3）。

図 3：夜にふらっとワークショップ①（2019 年 10 月 26 日）

また、香川大学グローバルカフェからイヴェント実施の依頼を受け、12 月 11 日に、同様のくるみボタンワークショップを開催した。同イヴェントでは、15 名（うち留学生 11 名）の参加があり、くるみボタン・マグネットを製作してもらった。昼食時だったこともあり自然と学生が集まり、メンバーを介して参加者間で積極的に交流するような、双方向型のワークショップを行うことができた。

・抹茶ワークショップとストーリーテリング

11 月 22 日に開催した第 2 回目の「夜にふらっとワークショップ」では、英語で説明する茶道体験とストーリーテリングを組み合わせたワークショップを実施し、7 名（うち外国人 1 名）の参加が得られた（図 4）。茶道体験では、メンバーが抹茶の点て方を説明し、参加者自身で抹茶を点てるところから楽しんでもらった。また、ストーリーテリングでは、志々島に伝わる逸話や、日本の伝承物語などを、語り部となったメンバーが声質を変えたり、登場人物を演じ分けたりしながら、わかりやすい英語で話をした。

図 4：夜にふらっとワークショップ②（2019 年 11 月 22 日）

・ミシガン州立大学生への京都ツアーと綿の紹介

11 月 30 日には、滋賀県彦根市にあるミシガン州立大学連合日本センターの生徒 12 名を対象とした、京都ショート・ツアーと香川県の綿の紹介を行った。同日は、ミシガン州立大学生 3 名に対して本プロジェクトメンバー1 名または 2 名のグループに分かれ、八坂神社や知恩院、平安神宮といった観光名所を巡った。各名所では、メンバーが事前に調べた情報をもとに、歴史や概要を英語で説明した。説明にはイラストを用いたり、メモとペンを常備して参加者の分からない漢字があると書いて意味を伝えたりするなど、参加者が理解しやすく、かつ楽しんでもらえるような工夫を施した。

ツアー内では、自分たちが製作したくるみボタンの和小物と、香川県の綿について英語で説明したカードを渡した（図 5）。また、口頭でも、香川県における綿花栽培の歴史や、讃岐三白の名称の由来についても説明した。これにより、多くの参加者から「香川県に行ってみたい」という声を聞くことができた。

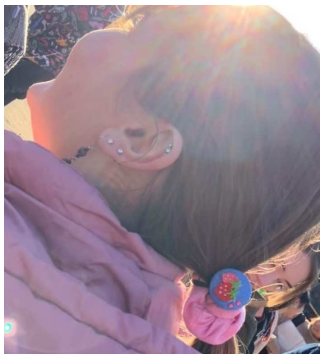

図 5：提供したくるみボタン（2019 年 11 月 30 日）

（３）三豊市志々島における活動

外国人参加者に、地域とのつながりを感じてもらうには、高松市内で和文化体験の機会を提供するだけでなく、地域の歴史や産業を実際に体験してもらうことが最も有効である。そのため、かつて地域産業であった綿花栽培が盛んに行われていた、三豊市の志々島を中心にまずはフィールドワークを行い、その調査結果を基に外国人参加者にショート・ツアーを実施した。

① 志々島でのフィールドワーク

ショート・ツアーを実施するにあたり、まずはメンバーが志々島の歴史や文化を深く理解する必要があった。そのため、2019 年 3 月 22 日と 8 月 7・8 日の計 2 回、フィールドワークを行った。

・第 1 回（2019 年 3 月 22 日）：本プロジェクト開始以前に、メンバー有志で志々島を訪れた。同日は、地元企業の協力のもと、志々島の自然資源や歴史的建造物の説明や案内を受けた。また、島民 2 名に島の歴史や郷土料理、観光の現状などについて、聞き取り調査を行った（図 6）。その中で、志々島では観光対策として、日本語による志々島マップや掲示板は既に存在するが、観光客の半数を占める外国人への英語での対応が不十分であるとの話を聞いた。ここから、本プロジェクト内で、志々島の歴史や観光資源などを記載した、英語による志々島マップを作成することにした。

図 6：第 1 回志々島フィールドワーク（2019 年 3 月 22 日）

・第 2 回（8 月 7 日、8 日）：志々島マップの案を得るために、再度フィールドワークを泊りがけで行った。グループに分かれてメンバーが島中を巡り、観光客が島を散策する際の参考となるような、ビュースポットや危険な箇所などの気づきを書き留めた。また、島民からも、志々島に伝わる伝説や行事について聞き取り調査を実施した（この際に聞いた志々島の伝説は、上記の 11 月に行われた「夜にふらっとワークショップ」において紹介した）。同日夜には、宿泊していたゲストハウス「きんせんか」において、島民から志々島に伝わる盆踊りの指導を受けた。

② 志々島ショート・ツアー

6 月 22 日と 12 月 15 日の計 2 回、留学生や外国人住民を対象に、志々島でショート・ツアーを行った。

・第 1 回（6 月 22 日）：高松高等専門学校の留学生 14 名（アジア、ヨーロッパ、アフリカ圏出身）を対象に行った。同ツアーでは、島のシンボルツリーである樹齢 1200 年の大楠と展望台（楠の蔵展望台）へ参加者を案内した（図 7）。その後、島の郷土料理である茶粥を体験してもらった。茶粥を 3 杯も食べる参加者もいるなど、好評を得た。また、ゲストハウス「きんせんか」にて、香川県の綿を使用したくるみボタンのワークショップを行った。その際も、讃岐三白についてや香川県における綿花産業史について説明した。

図 7：第 1 回志々島ショート・ツアー（2019 年 6 月 22 日）

・第 2 回（12 月 15 日）：カンボジア出身の外国人居住者に対して、第 2 回目となる志々島ショート・ツアーを行った。同ツアーでは、前回同様に大楠と楠の蔵展望台へ案内した。その後、島で最も標高の高い景勝地である横尾の辻まで登ったり、島にある神社の伝説を紹介したりした。また、志々島に残る両墓制（遺骨の処理のための埋め墓と、霊魂を祀る

ための詣り墓）についても説明することができた。島を散策した後は、休憩処「くすくす」にて、プロジェクトメンバーが仲介役となり、参加者と島民とが、互いの地域を紹介し合った。このことにより、ツアー内にて、参加者と地域住民間の交流を生み出すことができた。

③ 英語による『志々島マップ』の作成と配布

上記 2 回のフィールドワークをもとに、英語による『志々島マップ（SHISHIJIMA MAP）』を作成した。表面には、島の地形や島へのアクセスといった基本情報の他、志々島の歴史、大楠や神社の伝説など、島民へのインタビュー調査に基づいた内容を記載している。裏面には志々島の形状や、見所、さらに注意点などをわかりやすい英語で書いている（図 8）。

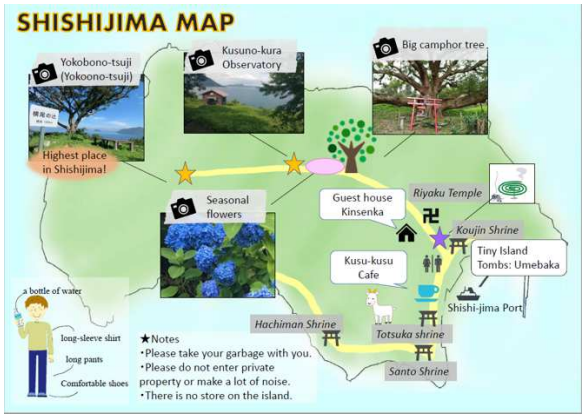

図 8：志々島マップ裏面

12 月に行った第 2 回志々島ツアーの際には、島民に草稿段階のマップを渡し、内容の確認をしてもらった（メンバーは、ツアー担当とマップ担当とで、それぞれ分かれて行動した）。メンバー間で内容を修正した後、2020 年 2 月 22 日に、完成したマップを島民及びツアーの際にお世話になった地元企業に配布した。また、志々島へ向かう途中の経由地である詫間駅、三豊市観光交流局、三豊市コミュニティバス詫間線、三豊市文化会館（マリンウェーブ）にもマップを設置している。

（4）実践的・定期的な練習

上記のような活動を行うために、必要となってくるのは各メンバーの英語力である。本プロジェクトでは、毎週月曜日と水曜日に 2 回、内容の異なる実践的な英語練習を行った。月曜日には、ツアーや和文化体験ワークショップを想定し、志々島の観光資源や、くるみボタンの作り方と抹茶の点て方の説明を英語で行った。参加者役とメンバー役とで分かれて練習を行った後、全体で披露し意見を出し合うという形式をとった。茶道やくるみボタンの説明では、小さな子供から高齢の方まで、様々な参加者を設定し、その都度対応を変えた練習を行った。

このような練習を積み重ねることにより、イヴェント時にはどの参加者に対しても、スムーズに対応することができた。このような実践的な練習の成果は、イヴェント後のアンケートから実感した。アンケートでは、イヴェント内容、メンバーの対応共に、全ての参加者から満足との回答を得ることができた。また、参加者のコメント欄では、「みんなが親切で素敵な笑顔だった」「楽しく作れた」「優しく、丁寧に教えてくれた」といった高評価を得た。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

（１）本学に与えた影響

本プロジェクトが本学に与えた影響は、学内における国籍を超えた交流の場の創出と、他大学への情報発信の 2 点である。大学では、多くの国々から留学生が集まるとはいえ、日本人学生と授業以外で関わる機会は少なかったり、留学生同士あるいは特定の日本人学生とのみ交流したりする傾向にある。しかし、学内のグローバルカフェにおいて、英語と日本語の両言語によるワークショップを行ったことで、この現状に変化をもたらすことができたのではないかと考える。

また、ミシガン州立大学生への観光案内では、参加者と会話を行う中で、互いの大学の特徴や学生生活を紹介し合った。そのため、本プロジェクトを通じて、本学の活動を他大学へと発信する契機になった。同時に、他大学の情報も得ることができた。今後は、このような他大学の情報に基づいた学びを、学生間で共有することで、互いの大学に刺激を与えられるような活動を目指したい。

（２）地域社会等に与えた影響

本プロジェクトが地域社会等に与えた影響は、志々島の観光における英語対応への寄与と、讃岐三白の国際的知名度の向上への貢献の 2 点である。志々島には多くの外国人が訪れているが、英語で観光案内ができる島民は 1 名しかいない。本プロジェクトは『志々島マップ（SHISHIJIMA MAP）』を作成し、島や三豊市で配布することで、こうした現状の打開の一助となったのではないかと考えている。同マップは、地理的情報の他、観光資源、島に伝わる伝説など、多くの内容を英語で記載している。折りたたむとポケットサイズとなるため、散策する際に持ち運べることはもちろん、旅の思い出としても持ち帰りやすいように工夫した。

2 点目は、讃岐三白の知名度向上についてである。和文化体験のワークショップ時には、讃岐三白や香川県の綿産業に関して、日本語と英語の両言語で書かれたポスターを用いながら説明を行った。加えて、綿について興味を持った参加者に対しては、香川県の綿の種を提供した。これにより、参加者に実際に栽培をしてもらい、共に綿花栽培における課題を考え合うきっかけを作ることができた。また、7 月に WeBase 高松と共催したイヴェントでは、湘南ラジオ放送よりインタビューを受けた。その際は、関東地域の不特定多数の視聴者に向けて、讃岐三白の綿について紹介することができた。さらに、ミシガン州立大学生への京都案内時にも、くるみボタンと讃岐三白の綿や香川県の綿産業に関する情報を記載したカードを贈った。まだまだ範囲は限られてはいるが、香川県の綿の知名度を向上させる第一歩となったのではないかと考えている。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

本プロジェクトが実施してきた和文化体験ワークショップやツアーでは、アメリカ、中国を始めとし、様々な国籍を持つ外国人の参加を得ることができた。このような多様な国からの参加者と接する中で、メンバー個人の英語力、コミュニケーション能力を向上させ

ることができた。

まず、英語力の面では、和文化や志々島に関する内容だけでなく、乗り物の乗り方といった日常生活において必要な情報も英語で説明した。加えて、イヴェントのポスターや志々島マップといった英語資料も作成した。これにより、必要な情報をダイレクトに伝えられるような言葉選びや、視覚的にわかりやすい英語表現について学ぶことができた。ストーリーテリング（11 月「夜にふらっとワークショップ」）を行った際には、声に抑揚を持たせ、ジェスチャーを効果的に使うことで、話の内容を理解してもらうことができた。実際に、本イヴェント終了時に実施したアンケートでは、参加者から、「ストーリーテリングが面白かった。」とのコメントを得ることができた。また、同月に行ったミシガン州立大学生への京都案内では、留学生の要望に沿いながら、メンバーがその場の状況を臨機応変に対応する必要があるなど、高度なコミュニケーション能力を要した。以上より、英語力とコミュニケーション力を鍛えることができたと実感している。

さらに、プロジェクト活動を通して、授業や自主学習で得た知識を、机上の空論に終わらせるのではなく、実践することができた。例えば、志々島において実施したフィールドワークでは、授業で学習した聞き取り調査を実践することができた。さらに、5 月から 9 月にかけて行った綿の栽培では、農学部の授業で学んだ植物に関する知識を役立てることができた。このように授業で得た知識を、プロジェクト活動を通して実践することで、改めて授業に対する意欲が向上するというような循環型学習となった。

６．反省点・今後の展望（計画）・感想等

（１）反省点

本プロジェクト活動における反省点は以下の 2 点である。

①大人数の参加者へのスムーズな対応

参加人数の上限がないイヴェントでは、誰でも気軽に参加できるため、多くの参加者を得ることができた。しかし、参加者の動向についてメンバー間で共有することができず、参加者を待たせるといったタイムロスを起こしてしまうことがあった。このような大人数の対応がスムーズにできなかったという点が、反省点の 1 つ目である。今後は、より効率的にメンバーが動けるように指示役を 1 人決めて、その他のメンバーが自身の状況を指示役に随時報告するという形式をとることが重要である。

②長時間滞在する参加者への対応

本プロジェクトでは、双方向型イヴェントの在り方を模索しながら、和文化体験ワークショップを開催してきた。その際、メンバーと参加者間及び参加者同士の会話を創出することを重視してしまうあまり、製作後も長時間滞在する参加者が見られた。その結果、作業スペースが一定の参加者で滞ってしまい、次の参加者をすぐに案内できない状況が生じた。このような事態を防ぐためには、周囲の状況に応じて、製作時間の目安を設定することが有効であると考える。

（２）今後の展望

本プロジェクトでは必ずイヴェント終了時にアンケートを実施してきた。その結果から、香川県を訪れる多くの観光客は、短時間の滞在をする傾向があることが分かった。つまり、香川県は単なる「経由地」としてみなされているのである（図 9）。観光客の長期滞在を促進するには、訪れる前に香川県の魅力を知ってもらう必要があるのではないだろうか。そのためには、地域外への積極的な働きかけが重要なのではないかと考えている。例えば 11 月に実施した彦根に滞在しているミシガン州立大学生に京都を案内した際、香川県の知名度について尋ねた。その際、四国という地方名は知っているものの、香川県については知らないという参加者が大半であった。このような参加者に向けて、香川県の綿を用いたくるみボタンの小物を贈ると同時に、讃岐三白の綿について紹介し、地域や国を超えて香川県の魅力を発信することができた。今後は、他府県にいる学生や外国人観光客へアプローチすることで、香川県を経由地ではなく、目的地として訪れる観光客を増加させることのできるような活動を行っていきたい。

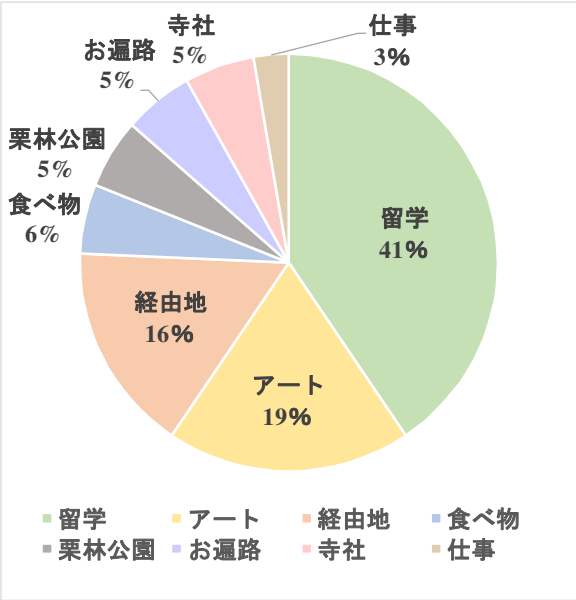

図 9：外国人観光客香川県を訪れた目的

（３）感想等

国籍や性別、年齢を問わず、多くの参加者に喜んでもらえることができ、プロジェクト活動に対して達成感を感じることができた。また、交流を深めた参加者が、イヴェントに継続的に参加してくれた際には、さらに距離の縮まった「おともだち OTOMODACHI」としての関係を育むことができたのではないかと考えている。一方、イヴェントを実施するにあたり、「理解のしやすさ」に、参加者とメンバーの間で差があることも実感した。ポスター作成時には、自分達の中ではうまくできたと思ったものでも、参加者には内容が伝わりにくいこともあった。また、ワークショップやツアー時の英語による説明では、長文よりも、ジェスチャーを交えた短文の方が伝わりやすいこともあった。このような経験を活かし、今後は、参加者目線で自分たちの行動を振り返ることを重視していきたい。

７．実施メンバー

代表者　林　美玖　（経済学部 3 年）

構成員　赤崎　夏子　（経済学部 4 年）　尾山　絢菜（経済学部 4 年）
田中　美樹　（経済学部 4 年）　大森　皓太（経済学部 3 年）
廣畑　日向子（経済学部 3 年）　那須　幸音（教育学部 3 年）
安井　万葉　（経済学部 2 年）　青野　桃子（経済学部 1 年）

塩崎　達也　（経済学部 1 年）　　高橋　由果（経済学部 1 年）
福圓　久留海（経済学部 1 年）

８．執行経費内訳書

配　分　予　算　額		174,891 円		
執行経費（品目等）	数量	単価（円）	金額（円）	備　考
虫よけスプレー	2	734	1,468	
軍手	1	311	311	
手さげ袋　半透明	2	380	760	
志々島フィールドワーク①	5	5,580	27,900	
交通費及び宿泊費				
チャルカ（糸紡ぎ機）	1	9,170	9,170	
コピー用紙	2	618	1,236	
光沢紙	3	1,540	4,620	
京都観光案内（往復）	6	8,190	49,140	
京都観光案内（片道）	1	4,440	4,440	
志々島ツアー交通費	3	2,540	7,620	
B4マット紙1000枚	1	9,883	9,883	志々島マップ増刷
裁ちばさみ	1	1,655	1,655	
防虫剤	2	1,293	2,586	
ボンド	3	388	1,164	
名前ペン	5	100	500	
ボールペン	5	68	340	
光沢紙	1	1,618	1,618	
志々島マップ印刷費		40,000	40,000	
志々島フィールドワーク②	2	2,640	5,280	
交通費				
豊浜郷土資料館交通費	2	2,600	5,200	
合　　計			174,891	